
何も伝えない

中後空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何も伝えない

【Nコード】

N4159B

【作者名】

中後空

【あらすじ】

短大生の佐藤誠は、同じバイト仲間の木村君に片想い中。彼女にならなくても、そばにいられたらそれでいい。小さな幸せを感じていた。だがある日、同じバイトの近藤の一言がきっかけで、心境が変わっていく。

第1話 私の好きな人

短大1年夏休み、近所の本屋でバイトを始めて、もうすぐ3ヶ月。最近の私のバイトでの日課は、シフト表を見ること。そして、密かに微笑むことでした。

私の小さな幸せは、本屋の息子で同じバイト仲間の、木村^{キムラ}涙^{ライ}に会うこと。彼は大学1年で、とても優しく、爽やかな笑顔に、私は一瞬で落ちました。彼女はいないらしいけど、きつとすぐに出来るんだろうなあ……。そう思うと憂鬱になるから、今を必死で楽しむ私。その時まで

それは11月後半、少し寒くなってきた頃。いつものようにシフト見て、彼がいることを確認。鼻歌まじりに階段を駆け上がり、レジを見る。

「佐藤！こつち」

レジから声がかかる。手をあげて、私を呼ぶ彼は、今日もアイドル並の爽やかさだ。私は足早にレジに向かう。

「お疲れさま。今日は空いてるね」
自然と笑顔になる。

「だろ？暇すぎてさ、郁なんて立ち読みしてんだよ、全く・・・」
ため息混じりに木村君は言った。サラサラな髪が触って欲しそうに、私の前を通りすぎて行く。

「おい！郁。お前いつまでさぼる気？」

レジから少し離れた雑誌が置いてある棚から、頭だけ覗いてた。

木村君の言葉に、頭が動く

「さぼってねーよ。整理してんの」

少し低い声でそう言っと、顔を出す。

「佐藤、お前そんなとこいないで、掃除でもしろよ」
眉間に皺を寄せ、鋭い目で私を見た。

「さぼってるあんたに言われたくないんだけど」

私はそう呟くと、レジを出て、その頭を見ながら近付く。木村君とは正反対の男がそこにいる。

短髪の黒髪をガシガシかいて、制服のシャツも長袖をまくりあげ、サッカー雑誌を読んでいた。彼の名は、近藤郁^{こんどういく}。木村君と高校が一緒で、大学まで同じ。私達3人は、同じ年ということで仲も良く、店長がシフトを同じ日になるように考えてくれてるらしい。なんていい人！私はそう思う。

「店の人間が立ち読みなんて何考えてんの？」

「お前こそ、涙の前だとデレデレして気持ち悪いつて苦情くるぞ」
無表情な横顔で彼は言う。そんな私達の会話を見ながら、木村君が笑って見ている。私達はいつもこんな感じだった。だから私は、優しい木村君と、ぶっきらぼうな近藤と三人で過ごすバイトの時間が永遠に続きますようにって、いつも神様に祈っていました。

第2話 帰り道

平日は7時から10時まで私は働く。この季節は夜風が冷たい。マフラーを顔にまで巻いて、空を見上げる綺麗な三日月が、その日は見えた。

ニヤーと可愛らしく足元から聞こえて足を止める。

茶色のめつきが鋭い猫が、私を見上げていた。

首もとの鈴が、チリン、チリンと揺れてる。

飼い猫らしい・・・

腰を落として、頭をなでると、可愛らしく泣いてくれた。フフツと思わず笑ってしまう。

「誠！」

突然の大声。驚き顔を上げる。にゃんこは、足早に逃げて行った。

あーあー・・・

ため息混じりに立ち上がる

「何よ。何かあった？」

少しふてくされて私が言くと、相変わらずの無表情な顔が近付いて来た。

近藤はやって来ると、後ろを振り返る。

見ると木村君が笑って手を振っていた。

「今日は遅かったから、送ってやれって、うるさくてさ、あいつ」
思わずペコつとお辞儀をしてしまう。

木村君は、そういう人なんだ。

「俺は、大丈夫だって言っただけだな」

近藤は、こういう奴・・・

「行こうぜ。寒いし」

足早に歩いて行く。木村君に手を振る。

彼が私のものになりますように・・・。なんて思わないから、誰のものにもなりませんように・・・

笑顔を見る度、そう思ってた。

近藤は私にかまうことなくスタスタ歩いてた。
同じバイトの子は、格好いいと話してたけど、木村君に比べたら、
どこがいいのかと、後ろ姿を見ながら思った。

「お前さ」

突然立ち止まると、近藤は振り返った。

「お前、涙のこと好きだろ？」

恋愛話なんて絶対興味ないだろう人間が、そう言つと驚くというより、何故そんなことを訊くのかと、疑問を抱く。のは、私だけだろうか？

キョトンとしたままだ私を近藤は、じっと見てた。

「突然、何よ」

「いや、確認」

「はあ？」

声が上がる。

「お前は、幸せそうでいいよな」

近藤はそう言つと、またスタスタ歩いて行つた。
何だろう。

「確認つて何よ！」

追いついて横に並ぶと、近藤はいつもの顔で言つた。

「涙なら諦めろよ。好きな奴いるから」

「え！」

驚いた私に、近藤は指をさして顔を近付けた。

「ほらな。お前、好きなんだろ」

ハハッと馬鹿にしたように近藤は笑い、歩いてく。

バイト以外でこうして話すことはなかった。

どうして突然そんな話をしたのか分からなかったし、それが冗談かどうか何故か聞けなかった。

第3話 笑顔

あれからしばらく、あいつには会ってない。

試験期間だったから私がバイトに行っていないから。

あいつがどうして、あんなこと突然訊いたのか
ずっと気になってた。

久しぶりのバイト。

いつものようにシフトを見つめる。今日は何故か先に近藤のシフト
に目が向かってた。やっぱり今日も来てる。

いつも鼻唄まじりに上る階段も、今日は一段、一段が緊張している
のがわかる。

ひさしぶり

いつもの笑顔で木村君が声をかけた。

お疲れ様

笑顔がひきつった気がして思わず顔を下に向けた。

郁がさ、淋しかったよ

えっ？

ええっ？

下げてた顔を思いっきり上げて木村君を見る。

木村君は、クスクス笑ってた。

そんなわけねーだろ

いつの間にか隣に近藤が立ってて、呆れた顔で私を見ていた。

お前いないと、この店かなり静かだぜ。今度、休みの時来てみるよ

近藤は、

ハハッと笑い歩いて行く。

相変わらずで、気にしてた自分がバカバカしくて気が抜ける。

佐藤、レジ代わってもらえる？郁と荷物運ぶからさ

話す暇もなく木村君は去っていった。

レジ打ちしながら二人の方を見る。近藤がバカみたいに笑ってて、むかついた。

お疲れ

近藤は私よりも1時間早く帰って行った。そっけない態度もいつも通り。

結局、からかっただけ？？歩いてく後ろ姿を見送った

試験どうだった？？

レジのお金を締めていたら木村君が声をかけてきた。

まあまあかなあゝ・・・

苦笑いしながら私が言う俺も、この前あったやつ最悪でさゝ・・・
なんて笑いながら話したす

木村君は私にいろんな話を聞かせてくれる。
学校のこと、家族のこと、店であった事件。。
いつも、楽しそうに話してくる。

その話の中で、登場人物は大抵、近藤がいて、彼女は出てこない。
だから尚更気になった。

あの時近藤が言ったことが
あのさ、

そう言つて横を見ると思いつき目が合った。

木村君彼女いるの？

訊いたら、私の小さな幸せが消えてしまいそうではなかった。

口を開けたまま私が動かなくなったから、木村君も動きを止めて私を見てた。

ハハッ・・・何訊くか忘れちゃった・・・

笑つてごまかす私を木村君は不思議そうに見てた。
それ以上、訊いてこないところが木村君らしい。

耳まで赤くなつてる気がして、私は、急いでレジを締めて、階段の方へ歩いて行つた。

うわぁ！！

思わず大きな声が出たから慌てて口を塞いだ。

階段の所で近藤が冷めた顔をして私を見ていた。

何してんの、こんなところで!!

うろたえた私をよそに、近藤は表情を変えず

邪魔かと思って

と呟く。

あのねえ!

そう言いかけた私に近藤はノートを差し出した。

何よ?

涙に渡してて

そう言っていると近藤は歩いていく。

そっけない態度に、私はそのまま近藤が歩いて行くのを見てみると、近藤は振り返り笑った。

頑張れよ、誠。

タンタンと軽やかに、階段を降りながら、近藤は帰って行った。

どうしてそんなことを言ったのかということより、

どうして笑って言ったのか私はしばらくそこから動けずにいました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4159b/>

何も伝えない

2010年12月21日03時16分発行